

碑は明治33年10月に建立されましたが、大正5年12月3日に贈位祝賀会が陶山神社境内で開催されました。この写真はその時のものではないかと思われます。(写真提供 深川泰子さん)

現代に通じる「深川君之碑」撰

10月23日の進歩ジュウム「皿山の群像～今、有田に求められるもの」には、会場一杯のご出席をいただき予定を一時間もオーバーする熱心な質疑が行われました。主催者として厚くお礼申し上げます。

江戸末期から、明治初期にかけての動乱期に海外へ向け果敢にチャレンジした先人の情熱と、ご出席のパネラーの先祖への想いが聞く人にひしひしと伝わってきました。

当日のパネラーの方が多くの資料を準備されながら時間の都合で発表できなかったものに、八代深川栄左衛門の碑文がありました。その一部をここに紹介します。「深川君之碑」は有田町大樽・陶山神社の境内にあります。

この碑は、額の題書が大隈重信、撰（述作）が久米邦武、書は西岡逾明でいずれも有名な方です。

碑文を現代文に訳した文書（森田前館長・山中和子さん共作）はシンポジウムの当日、全出席者に配付されましたので、既にお読みの方もおられると思いますが、その経営思想は130年後の現在に相通ずることがたくさん述べてあります。

例えば、江戸末期に藩へ申し出て、貿易鑑札を10枚に増やしたこと、窯業界の先頭に立って有田町全体

の利益を図ったことです。また、美しい磁器を作るためには自分の心が美しくなければならぬ。生け花や茶道を身につけ、古陶磁を鑑賞し、文化人と交流して教養を深めねばならぬと、常に切磋琢磨する必要性を説いています。

そして、有田の人々は一般に派手好きである。鳴り物入りで遊興するのが好きである。これでは身を亡ぼすので、儉約をしなければならぬと説き、自分自身（深川栄左衛門）もせいたくをひどく嫌っていたと「撰（述作）」に書いてあります。

更に、困った人がいればひそかに援助し、人間は怠けたらいかんと戒め、お付き合いも丁寧で、先見性をもっていたと述べています。

この碑文の後半では、陶磁器の製造家は常に技術を磨き、商いは薄利に甘んじるべきである、と八代深川栄左衛門は言っていたと、撰に当たった久米邦武は書いています。

八代深川栄左衛門は、明治22年10月23日（奇しくも進歩ジュウム当日が命日でした）に58歳で亡くなるのですが、これまで紹介した撰は現代に通じる経営思想ではないでしょうか。

（久富）



八代深川栄左衛門については「有田町史 陶業編Ⅱ、政治社会編Ⅱ、商業編Ⅱ」などにあります。また、「日本の「創造力」②殖産興業への挑戦」には碍子生産からみた深川栄左衛門について書かれています。

皿 山 冬 No.44

有田町歴史民俗資料館・館報

「明治の群像」 今、有田にもとめられている



基調講演

「幕末・明治の
佐賀と有田」

講師 福岡博先生（郷土史家）



有田の歴史は他の地方とくらべて比較的歴史が浅い方だが、にもかかわらず研究資料は県立図書館にあるものだけでも有田に関するもの145冊、論文46冊、窯跡発掘報告書32冊の蔵書がある（平成8年調査）。また、全10巻の「有田町史」や「肥前陶磁史考」など、ひとつの町にこれだけの資料があるのは驚くべきことである。それだけに有田以外の人間が有田の話をするのは慎重になる。以前機会があつて有田で話したことがあつたが、当時存命中の松本源次さんからいくつかの間違いを指摘されたことを思い出す。

有田は佐賀の中でも特異な気風があり、それらは窯元と職人との物前勘定や美食家が多いのに正月料理は手をかけない、新盆（7月）であるなど、佐賀平野の者には知らないことが多い。これらの民俗学的なことは生きた人間から話を聞くことで、今を知ることができる。以前に行った調査の折り、大樽の斉藤さんに「コンカイ」という歌を歌ってもらつたが、今では誰も知っている人がいないのではないだろうか。

幕末ごろの正司考棋は佐賀藩に対し「儉法富強録」などで鍋島直正の行った農政を批判し自由なものをついた学者であるが、このほかに八代深川栄左衛門や深海平左衛門などが世襲制度に守られていた赤絵屋の制度や、田代紋左衛門が一手に行っていた貿易の門戸を広げるように藩へ注進するなど、有田にはこういう自由な雰囲気があつたのではないかと。

明治維新後はドイツ人化学者ワグネルを有田に招聘し、「有田は古い伝統だけではダメ、これからは化学の知識を取り入れるべき」とし、彼によってコバルト

や王水[※]の使用、石炭窯での焼成など有田焼に近代化がもたらされた。また、小城の江越礼太によってこれからは一子相伝ではだめだと皿山全体のレベルアップを図るために勉修学舎が創立され、これが今日の有田工業高等学校へと受け継がれている。明治23年に起きた石場騒動はこれら有田の近代化を阻んだ事件ではあるが、権力に立ち向かう人とそれを守ろうとする人の対立でもあり、こういう対立が有田のバイタリティーでもある。

このほかにも久富与次兵衛、納富介次郎、深川六助など多くの人材がこの時代は生んでいる。現在の不況はほとんど外圧によるもので、過去に同じ状況となった時その対策を一番先にやったのは有田ではないだろうか。後継者を育成し、デザインも世界に通用するものにし、文化事業にも手を出して情報を得ることなどが今求められていると思う。

※王水～濃塩酸と濃硝酸との混合液で、金、白金などの貴金属を溶解する

パネラー

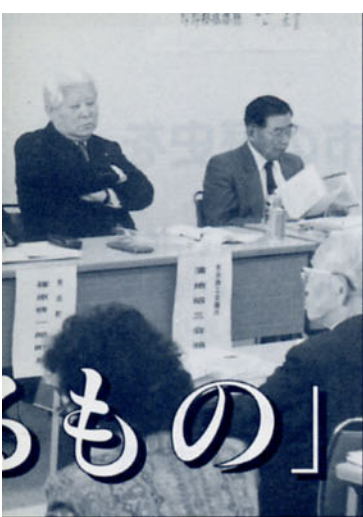


辻 常陸さん

（辻 勝蔵 孫）

祖父が亡くなった時は蔵前（現東京工大）の窯業科3年生で、ちょうど帰省中だった。とにかくやかましい人だったが、仕事に対しての熱意はあつたようだ。一時期東京・目黒の不動山駅付近の空き地に工場を造り父喜一と経営し、東京と有田を行き来していた。

のちに有田町長をつとめたこともあり、風貌は長い髭をはやし、よく人力車に乗って出歩いていた。職人と窯元（勝蔵）は今と違い、家来と殿様のような関係



平成11年度企画展「明治の群像」にちなみ、進歩ジュウム（不況脱出の願いを込めての造語です）を開催しました。講師の福岡先生には幕末から維新にかけての佐賀と有田の様子を、昭和30年代から有田を訪れて調査を続けてこられた結果を踏まえてお話いただきました。また、各パネラーの方々には直接・間接的に触れ合ってきた先祖に対しての思いを語っていただき、蒲地会頭や篠原町長には先人が残してくれた遺産をこれからの時代にどのように生かしていくかを熱く語っていただきました。

残念ながら当日差し支えて参加されなかった方にも当日のお話の要点をかつまんでお知らせします。

だったのではないだろうか。

極真焼（共土の匣鉢の蓋を密閉し、光沢のよい磁器を焼く方法）は八代辻喜平次が始めたが、皇室に差し上げるものの工夫だった。



山中 和子さん

（八代 深川栄左衛門 曾孫）

深川家は小城から移住し、初代又四郎は元禄の8年前に死亡し、その墓は法元寺にあり2代以降は本幸平の墓地にある。八代深川栄左衛門は当時英国製のガラスの碍子を使用していたころ、磁器製碍子の生産に取り組んだが、周囲の人はなぜ美術的な価値のないものを作るのか不思議がった。が「電信は産業発展上必要なものだ」という信念のもとに失敗を繰り返しながらも製作し、明治8年頃から全て碍子は日本製になった。

維新後町全体が自由奔放になっていたのを、栄左衛門が取りまとめ、その後久米邦武の助言を受けて明治8年に香蘭社が発足した。当事者たちは不安ながらも世界に飛躍する希望に燃えていたのではないだろうか。



深川 巖さん

（深川忠次 孫）

今日（10月23日）は八代深川栄左衛門の命日で、忠次はどんなに忙しくてもこの日は仕事を休んでいた。この意志を継いで毎年「記念碑祭」を続けている。忠次は先祖や親を考えることは焼き物を考えることと同じで、夢を大事にし、道端には拾って磨けば光るダイヤモンド（ビジネス）があるといった。人のやらな



いことをやる、他より一步先を歩く、世界的視野を持つ、量より質、生産より開発、常に創造的活動を求めるとソニースピリットに通じる考えを持っていた。

「忠次さんのとんぼ返り」という言葉があって、焼き物作りに熱中するあまり、アイデアが浮かぶと帰宅途中であっても工場にすぐさま駆けつけていたという。



蒲地昭三 有田商工会議所会頭

（有田町歴史民俗資料館協議会会長）

現在閉塞状態の有田であるが、辻勝蔵・八代深川栄左衛門・深川忠次の三者は自分の家、会社を大きくするというだけでなく万民に裨益した。創業者には大きな志があり、また必要である。これからは企業合同や組合の合併なども必要で、後継者の育成のためには窯業大学校を文部省管轄にして、質の高い製品を作っていくことが求められている。小手先ではなく、性根を入れてやっていかなければならない。



篠原啓一郎

有田町長

今までの行政は枠の中に入って事業を行ってきたがこれからは個々にその枠を出ていく時代である。個人が光り輝く事が国際的、国内的、企業的にも大事で、多少落ちこぼれがあっても仕方ないのでは。

伊万里・有田が国内外で有名なのは先人たちのおかげであり、不況不況と言わずに自ら行動して未来を切りひらいてほしい。

（文責 事務局）

進んでいます、皿山の模型作り

今年度の活動の一つである「皿山の模型作り」は、毎週月曜日の午後に参考館の部屋に集まって作業が続けられています。まず、周辺の地形を発砲スチロールの板を等高線ごとに切り取って重ねていき山を作っています。「安政6年 松浦郡有田郷図」をもとにしていますが、いまではなくなってしまったお寺や登り窯などの姿を少しずつ再現していきます。

また、10月30日には有田小学校の子供たちと一緒に「古地図を手にして皿山を歩く会」を催しましたが、今から140年前と同じ小路が残っていたり、本幸平の



桂雲寺では「御手の観音」さまを見せていただいたりと秋の一日、江戸時代の皿山を体験しました。

模型作りメンバーによる作業の様子

千客万来 有田の将来を担うこどもたち

9月22日有田中学校2年生の男子生徒13人が林先生の引率のもとに来館。これは職場訪問の授業の一環で、何と学芸員の仕事を体験するというものでした。「学芸員」という職種がまだまだ市民権を得ていないと思込んでいた当館の学芸員は嬉しさ半分、面はゆさ半分でみなさんをお迎えしました。

その後、10月13日には有田小学校の4年生41人が、江口、筒井両先生とともに来館。有田の先人を学ぼうと企画展見学を兼ねての授業を館内で行いました。事前に「皿山なぜなぜ」や「有田皿山さんぼ史」、そして最先端のインターネットを利用して予習をしていた子供たちの質問はとても鋭く、館長と学芸員の二人で対応しましたが、答えに窮して考え込む場面も。

10月26日には佐賀県立嬉野商業高等学校2年生160人が「泉山磁石場の歴史と有田焼について」の研修に来館。ふだんは立ち入り禁止の磁石場の中に入り、当館の企画展や参考館の陶片を見学されました。

当館としましては、いつも何気なく焼き物に囲まれて生活をしている子供たちが、有田や焼き物の歴史についての疑問を調べることでふるさとの素晴らしさを

再認識する機会に少しでもお手伝いできたこと、嬉しく思います。



探しています、陶器市の歴史を

来る平成15年に陶器市は100周年を迎えます。

これは明治29年に本幸平の桂雲寺で第一回有田五二会主催の陶磁器品評会が開催されてからの回数です。その間第二次世界大戦で中断された年もありましたが、年々その規模は大きくなり今では全国的な催しとなりました。ここに至るまでには多くの人々の努力があったのですが、当館では今後、それを顕彰する資料を収集していこうと思います。

例えば当館には第一回陶磁器品評会の賞状や、昭和9年の西松浦郡陶磁器品評会有田町協賛会発行の「品評会ニュース」、大正10年頃の写真などがありますが、これらのほかにも陶器市ポスターや入賞作品などをお持ちの方は〔電話43-2678〕までお知らせください。

寄贈資料紹介

- ◆電動ミシン(米国製)一式 大 樽 手塚信雄氏
- ◆電気火鉢、手動マッサージ器 福 岡 西健一郎氏
- ◆地券證 岩谷川内 山口秀市氏
- ◆染付鉢(喜三製) 大 樽 中島政利氏
- ◆徳 利(大正3年銘) 黒牟田 梶原辰一氏
- ◆羽 釜

ありがとうございました。



10月に町内外の事業所において、当館と陶磁美術館の利用状況をアンケートにより調査しました。調査対象182人のうち、175人から回答をいただきました。訪問回数1~3回が60%、3~5回が20%、100回以上も2名いました。

訪問して、展示内容に興味深かった、役に立ったが76%でした。また、来館の目的では古窯陶片や窯業史資料調べが24%、家族と共に有田を勉強するためが17%。陶磁美術館では古陶磁から近代までの焼き物の流れを勉強したが31%、お客様を伴つての来館も20%ありました。

とくに昨年の企画展「我が家の写真が語る有田の近現代史展」と「昭和初期の有田皿山の風景」映写会を見るために過半数の方が来館されています。

「行ったことがない」と答えた方も資料館で72名、美術館で78名いました(町外が殆ど)。しかし、チャンスがあれば行ってみたいが80%です。このことは当館で「仕掛けづくり」をすれば、来館していただくことを意味します。

また、要望としては特別展・企画展の充実、見学会の実施、常設展の充実、ミニコンサートの開催、休憩スペースの充実、レファレンス機能の充実などがありました。このほか多くのご意見をお寄せいただいておりますが、可能なものから充実したいと考えています。アンケートに答えていただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

(久)

季刊『皿山』

通巻44号(平成11年12月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185